



TITLE:

泌尿器科疾患の家計に及ぼす影響

AUTHOR(S):

上田, 公介; 大田黒, 和生

CITATION:

上田, 公介 ...[et al]. 泌尿器科疾患の家計に及ぼす影響. 泌尿器科紀要
1987, 33(10): 1531-1535

ISSUE DATE:

1987-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/119320>

RIGHT:

泌尿器科疾患の家計に及ぼす影響

名古屋市立大学医学部泌尿器科学教室（主任：大田黒和生教授）

上 田 公 介 ・ 大田黒 和 生

THE ECONOMICAL IMPACT OF MEDICAL EXPENSES ON THE FAMILY OF UROLOGICAL PATIENTS

Kousuke UEDA and Kazuo OHTAGURO

*From the Department of Urology, School of Medicine, Nagoya City University
(Chairman: Prof. K. Ohtaguro)*

We handed out questionnaires to determine the impact of medical expense on the household economy at our university hospital in July, 1986. The urology department had more many male and aged patients than the other departments. The monthly medical expense average for outpatients of urology and other departments was 29,705 yen, 20,298 yen and for inpatients 32,632, and 59,591 yen, respectively. Of the urological patients, 64.1% were concerned about great influence of medical expense on the household economy.

Key words: Medical expenses, Household economy

緒 言

泌尿器科疾患のもたらす国家・社会的損失を論ずる時、患者個人の経済状況（家計）が問題となる。すなわち、泌尿器科患者の医療費負担はどの程度であるのか、また一人一人の患者はその負担をどのように感じているのかという点が浮かび上がってくる。そこで、このような観点から泌尿器科患者を対象としたアンケート調査を行ない、この結果を元にして泌尿器科疾患の家計に及ぼす影響について述べてみた。なお他科の患者との比較を行なうため、同じアンケート調査を全科に広げ、行なった。

対 象 と 方 法

1986年の7月15日から7月31日までの間の1日を取り、名古屋大立大学病院の入院患者および外来患者を対象として名古屋市立大学病院医療情報部の協力を得て、アンケート調査を行なった。対象は内科3科（1内、2内、3内）、外科2科（1外、2外）、産婦人科、整形外科、耳鼻科、眼科、皮膚科、精神科、小児科、歯科、麻酔科、放射線科、泌尿器科の16科、18病棟の計1,243名に対して医師または看護婦が患者にアンケート用紙を直接手渡し、回収するという調査方

法を取った。なお小児例では母親または付添人がアンケート用紙に記入し、眼が見えない者や手の不自由な人などでアンケート記入の不可能の人に対しては調査できなかった。

アンケート調査の内容は次の3項目に分かれており、1)医療費が家計に及ぼす影響、2)患者さん自身の情報保護の問題、3)大学病院のありかた、であった。ここでは1)の結果のみについて述べ、2)と3)については触れない。

統計的解析方法は χ^2 検定、Student-t 検定、Mann-Whitner の方法などを用いた。

結 果

回収率は、前述したように、医師または看護婦が患者に直接アンケート用紙を手渡し、回収するという調査方法を取り、身体的理由などによりアンケート調査を拒否された方には調査を行なわなかったため、算定できなかった。ただ直接手渡し、回収した用紙で、全項目が白紙のものはなかった。個々の質問項目での解答率はパーセンテージで示した。したがって和して100%に満たない項目では、無解答の者が残りのパーセントを占める。

回収されたアンケート用紙数は、外来739名、入院

Table 1

アンケート調査(1986.7)			
外 来		入 院	
U R O	16	U R O	23
その他	723	その他	481
	739		504
16 科 18 病棟		1,243名	
年 齢			
	U R O	54.5* (3-87)	
	その他	46.9* (0-90)	
		P* (%) < 0.05	

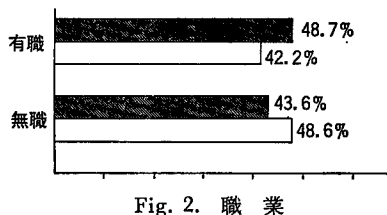
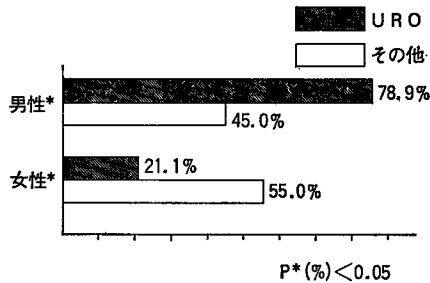


Fig. 2. 職 業

Table 2

受 診 回 数/月

U R O	1.7* (0.5-4.0)
その他	2.6* (0-25)
P*(%)<0.05	

通 院 期 間

U R O	48.9ヵ月 (0.25-240ヵ月)
その他	33.7ヵ月 (0-630ヵ月)

504名の計1,243名であり、このうち泌尿器科患者（以下 URO と略す）は外来16名，入院 23 名の計 39 名（全体の3.1%）であった（Table 1）。

1. 年齢 (Table 1)

年齢は，URO では3歳から87歳まで（平均54.5歳），その他の科では0歳から90歳（平均46.9歳）であり，URO は他科に比べて高齢者が多い傾向が得られた（ $p<0.05$ ）。

2. 性別 (Fig. 1)

男女比は，URO では男性患者78.9%，女性患者

Table 3. 保険の種類

	国 保	その他
U R O	21 (53.8%)	15 (33.3%)
その他	599 (49.8%)	515 (42.8%)

Table 4. 同居人数

U R O	3.5人
その他	3.7人

Table 5. 入院期間 (日)

U R O	39.4*
その他	167.2*

P*(%)<0.05

21.1%，その他の科ではそれぞれ45.0%と55.0%の比率であり，URO は他科と比較して男性患者が多かった（ $p<0.05$ ）。

3. 職業 (Fig. 2)

職業に就いている人と無職の人の割合は，URO と他科ではほぼ同じパーセンテージであった。ちなみに URO では有職の人48.7%，無職の人43.6%であった。なお無回答は7.7%であった。

4. 受診回数と通院期間 (Table 2)

外来患者における1ヵ月あたりの受診回数は，URO では0.5回から4回，平均1.7回，その他の科では0から25回（平均2.6回）であり，URO の患者では有意に外来通院回数が少なかった（ $p<0.05$ ）。

一方，通院期間では URO と他科では差がみられなく，平均通院期間はそれぞれ48.9ヵ月と33.7ヵ月であった。

5. 保険の種類 (Table 3)

保険の種類では URO と他科ではどちらもほぼ同じ傾向で，国保がやや多く，URO では53.8%，その他の科では49.8%が国保であった。

6. 同居人数 (Table 4)

同居人数は4人未満が多く，URO では平均3.5人，その他の科では3.7人であった。

7. 入院期間 (Table 5)

入院期間を URO と他科で比較してみると，URO では有意に短く，平均39.4日であり，他科では167.2日であった（ $p<0.05$ ）。

8. 普通の健康人と同じように働いて収入を得てい

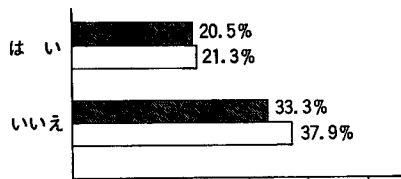


Fig. 3. 普通の健康の人と同じように働いて収入を得ていますか。

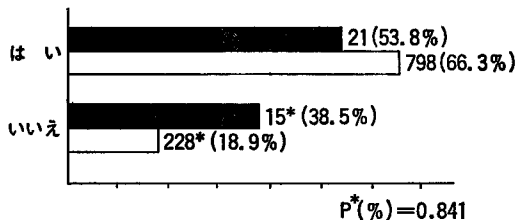


Fig. 4. あなた以外で家で働いて収入を得ている人がいますか。

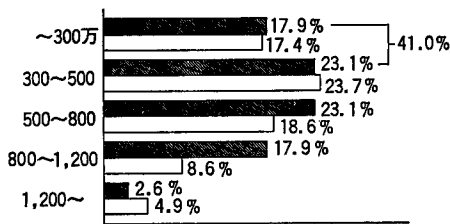


Fig. 5. 家族の年収

るか (Fig. 3).

普通の健康人と同じように働いて収入を得ていると答えた人は、URO では20.5%，その他の科では33.3%であり、全体に働いて収入を得ている人は少なかった。

9. あなた以外で家で働いて収入を得ている人がいますか (Fig. 4)

本人以外の家族の中で働いて収入を得ている人の割合は、「はい」と答えた者ではURO 53.8%，その他の科66.3%と両群間に差がみられなかったが、「いいえ」と答えた者の割合はURO では38.5%，その他の科18.9%であり、本人以外の家族で収入を得ていない人の割合はURO では他科と比較して有意に多かった ($p(\%)=0.841$).

10. 家族の年収 (Fig. 5)

家族全部の年収を調査してみると、URO では他科と差がみられなかったが、年収500万円未満がURO では41.0%，その他の科でも41.1%を占めていた。

11. 本院へ支払った金額 (Table 6)

本院へ支払った1カ月の金額 (自己負担金) は、

Table 6. 本院へ支払った金額 (自己負担金)/月 外 来

URO	21,942* (0-220,000) (n=12)
その他	8,727* (0-560,000) (n=542)
P*(%)<0.05	

入 院

URO	32,632 (400-130,000) (n=15)
その他	59,591 (0-470,000) (n=314)

Table 7. 本院以外でかかっている病院

	あ り	な し
URO	12 (30.8%)	26 (66.7%)
その他	354 (28.5%)	780 (62.8%)

Table 8. 本院以外の病院へ支払った金額

URO	4,670 (0-58,000) (n=19)
その他	4,715 (0-300,000) (n=612)

Table 9. 病院以外にかかった費用 (風邪薬・カテーテル・装具など)

URO	3,093* (600-15,000) (n=9)
その他	6,856* (0-170,000) (n=241)

P*(%)<0.05

外来ではURO 21,942円、その他、8,727円であり、有意にURO が高額であった ($p<0.05$)。一方、入院ではURO は他科よりやや安かったが、統計的に有意差はみられなかった。1カ月の入院中に支払った自己負担金は、URO では32,632円、その他59,591円であった。

12. 本院以外でかかっている病院および本院以外の病院へ支払った金額 (Table 7, 8)

本院以外にかかっている病院が「あり」と答えた者はURO では30.8%，「なし」と答えた者が66.7%であり、他科と比較して有意差がみられなかったが、約30%の患者が本院以外の病院にかかっていた。

一方、本院以外の病院へ支払った1カ月の金額は、やはりURO その他の科ともほぼ同額であり約4,700円を支払っていた。

13. 病院以外にかかった費用 (Table 9)

風邪薬や医療器具、装具など病院以外にかかった費用を調べてみると、URO では他科より有意に少額であり、それぞれ1カ月3,093円と6,856円であった

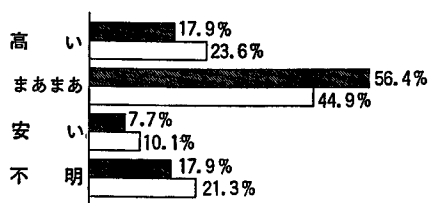


Fig. 6. 現在支払っている医療費をどのように感じますか。

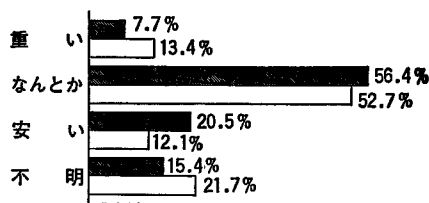


Fig. 7. 現在支払っている医療費は家計にどの程度影響を及ぼしているか。

($p < 0.05$).

以上今回調査した1カ月の医療費をみても、外来では「本院へ支払った金額」+「本院以外の病院へ支払った金額」+「病院以外にかかった費用」の合計金額は、URO では29,705円、その他の科では20,298円であり、入院患者では前述したように、それぞれ32,632円と59,591円の医療費を要していた。

それでは現在支払っている上記の医療費をどのように感じているかという問に対しては、URO と他科では大差がみられなく、高いと感じている者が前者では17.9%、後者では23.6%であり、まあまあと感じている者は、前者で56.4%、後者で44.9%であった。ちなみに医療費が安いと感じている者は、前者では7.7%、後者では10.1%という結果であった (Fig. 6)。

14. 医療費の家計におよぼす影響 (Fig. 7)

次に現在支払っている医療費は家計にどの程度影響を及ぼしているかという問に対し、「重い」と答えた人はURO で7.7%、その他の科で13.4%であり、「なんとかやっていける」と答えた人はURO では56.4%、その他の科で52.7%を占めた。URO と他科では統計的に有意差がみられなく、「重い」と感じている人と「なんとかやっていける」と感じている人を合わせると、URO では64.1%、その他の科では66.1%が医療費の家計に及ぼす影響が大きいと考えている結果が得られた。

考 察

今回のシンポジウムでは「泌尿器科疾患のもたらす国家・社会的損失」という大きなテーマでディスカッ

ションが行なわれたが、筆者らは最も問題となる個人レベルの問題、すなわち「泌尿器科疾患の家計に及ぼす影響」について論じてみた。この点をより具体的にするため全科を対象としたアンケート調査を名古屋市立大学病院医療情報部の協力に行ない、年齢、性別、1カ月の医療費、家計に及ぼす影響などについて、泌尿器科とその他の科の間で比較検討した。

まず年齢、性別については、予測されたことではあるが、URO では他科と比較して男性、高齢者が多かった。

職業に就いている患者は意外と少なく、無職はURO 43.6%と他科との間に差がみられなかったが、普通の健康人と同じように働いて収入を得ている人は、URO ではわずか20.5%で、その他の科でも約1/3にしか過ぎなかった。さらに家族の中で本人(患者)以外働いて収入を得ている人はせいぜい50~70%ぐらいであり、ことにURO では患者以外の家族の中で働いて収入を得ていないと答えた者が38.5%もあり、他科より著しく多かった。

実際必要とした1カ月の医療費(自己負担分)を計算してみると、外来では「本院へ支払った金額」+「本院以外の病院へ支払った金額」+「病院以外にかかった費用」の合計は、URO では29,705円、その他の科では20,298円であり、入院ではそれぞれ32,632円と59,591円であった。これを家族の年収で考えてみると、年収500万円未満がURO、他科とも41.0%を占めるので、医療費の家計に占める割合は約7.0%ということになる。この数字は決して大きなものではないが、前述したようにURO では高齢者が多く、患者以外にも働いて収入を得ていない家族が多く、通院期間が長いことなども考え合わせると、家計に及ぼす医療費の影響は無視できないものであろう。事実現在支払っている医療費を高いと感じている者(17.9%)とまあまあと感じている者(56.4%)を合わせると、74.0%が相当負担と感じており、現在支払っている医療費の家計に及ぼす影響については、64.1%の人が大と考えており、泌尿器科疾患の家計に及ぼす影響が大きいと考えられた。

毎日新聞が1986年9月に行なった「がん全国世論調査」の結果をみても、本人や本人以外の家族が入院しなければならぬ病気にかかった時、経済的に心配があると答えた者が40%もあり、また「なぜ心配があるのか」という問に対しては、「預・貯金などの蓄えが少ない」と解答した者が60%も占めていた。このことから、誰しも病気になった場合にはまず経済的問題を念頭におき、医療費が家計に及ぼす影響が大きいのを

実感として感じ取っているであろう。

日本は今後益々高齢者が多くなり、したがって泌尿器科患者が増加するものと思われる。泌尿器科疾患の予防が今後の医療費の低下をもたらし、ひいては医療費の家計に及ぼす影響が少なくなるものと考えられる。

結 語

泌尿器科疾患の家計に及ぼす影響を調べるため全科を対象としたアンケート調査を行ない、泌尿器科と他科とを比較し、以下の結果を得た。

1. 泌尿器科患者は男性、高齢者が多かった。
2. 無職の割合は泌尿器科では43.6％、その他の科では48.6％を占めていた。
3. 外来受診回数は泌尿器科患者は他科より有意に少なく、また入院期間も短かった。
4. 泌尿器科では本人以外の家族で働いて収入を得ている人は少なかった。

5. 本院へ支払った自己負担金は泌尿器科では外来負担分が他科より高額であったが、入院費では差がみられなかった。

6. 家族全部の収入を合わせても年収500万円以下が全体の41％を占めていた。

7. 泌尿器科では、現在支払っている医療費を高いと感じている人は17.9％、まあまあと感じている人は56.4％であり、64.1％が家計に及ぼす影響が大きいと考えていた。

泌尿器科疾患の予防が医療費の低下をもたらし、家計に及ぼす影響を少なくするものと予測される。

稿を終えるにあたり、アンケート調査に御協力下さった名古屋市立大学病院医療情報部副部长宮治眞先生と統計的解析に御協力下さった名古屋市立大学計算機センター長谷川泰洋先生に感謝いたします。

(1987年3月19日受付)